

第31回同窓会大会が開催

27年に創立70周年の記念事業を

第31回同窓会大会が平成25年11月16日、学園3号棟教室において全国から31名の同窓生が参加し開催されました。本県からも前会長の田中義治さん（23期生）が参加されました。同窓会大会の詳細は本部からの同窓会会報をご覧くださいと思いますが、平成27年は学園創立70周年を迎える節目の年なので、記念事業が検討されるようです。今回の支部だよりには支部活動に関係のある主な事項を抜粋してお知らせいたします。

平成26～27年度の事業計画では次の事項が承認されました。

(1) 組織活動及び財政確立の推進

① 組織運営体制の整備

活動停滞支部の解消、地域別ブロック大会開催と活動支援、若年層会員の活動参加促進、同期会（卒期毎）との連携強化等

② 財政基盤の確立

会員納入率の向上、長期未納者への永年会費納入促進、創立70周年記念事業に伴う募金活動への協力

(2) 学園発展のための連携活動

① 学園教育の社会的貢献の広報活動事業

市民・関係団体向け学園公開講座の開催、卒業生優良活動事例集（第3号の発行と配布）

② 学園創立70周年記念事業（平成27年）の検討と募金の開始

なお、今回は役員改選の年であり、次のとおり26～27

年度の新役員（会長、副会長）が選出されました。

会長	九石 裕	(23期)	栃木県
副会長	倉辻 芳次	(19期)	茨城県
副会長	西村 勝夫	(22期)	茨城県
副会長	黒澤 賢治	(25期)	群馬県



鯉淵学園の思い出

鯉淵学園の思い出を引き続き加藤 整さん（10期生）に執筆を依頼いたしました。今回は宮島三男先生と早川孝太郎先生のことを書いていただきました。

宮島先生と早川先生のこと

鯉淵学園の本科に「農業協同組合科」が開設されたのは昭和24年4月ですが、その責任者としてカリキュラムや講師陣の編成に当たられたのが宮島三男先生でした。

宮島先生は大正10年熊本八代市の生まれ、旧制佐賀高校を経て昭和19年9月に東大農学部を卒業されています。高校、大学ともに鞍田純先生の後輩でした。学徒動員で海軍生活の後、復員後昭和21年5月に八代市役



所に入られて農地改革の実務に従事（10期生 加藤 整）されています。農地改革が一段落した24年3月に市役所を退職、同年4月に鯉淵学園に転職されました。これには東畑精一先生のお奨めがあったらしい。

農業協同組合科が開設されると同時に、宮島先生はその責任者として自ら農協論を担当されるとともに、農協法、農協簿記、経営分析などの関係科目の講義について講師の手配などに腐心されていました。数年後これらの科目のいくつかを担当されることになってからは、自ら案出された「モデル農協簿記実習」など農協の実務を総合的、体系的に学ぶシステムを作り上げ、カリキュラムに組み込まれました。東京から出講されていた笠原千鶴先生（法政大学）の農協簿記の講義なども学生と一緒に聞いて科目間の調整をとりながら、現場の実務に即したものに工夫をこらされたものであったと聞いています。

その後、全国農協中央会が中央協同組合学園を開設することになったこともあって、鯉淵学園の農業協同組合科は昭和44年11月に廃止することが決まりました。これに伴い、宮島先生も鯉淵学園を退職、44年9月に全国農協中央会（中央協同組合学園）に移籍されることになりました。この中央協同組合学園で先生は教務部長の要職を務められるとともに農協論を担当されていました。鯉淵学園を含めて、昭和24年から平成3年まで43年間にわたり農協論を講じて来られたわけです。

この間、鞍田先生の還暦記念論文集に「今後の農協」（昭和39年）を執筆、昭和59年には長年の研究成果をまとめて『新農協論講話』を出版されています。また、雑誌「家の光」（昭和50年5月～51年11月）に「協同

のこころ」という巻頭言を執筆、その他「農協運動発展の足跡」(1980年)、「わが国における協同組合研究の流れ」(1982年)など数多くの注目すべき論稿があります。さらに宮島先生没後、農協科最後の卒業生である伊藤喜代次氏(26期生)のご尽力で、追悼誌『熱情の師 宮島三男先生を偲ぶ』(平成19年)が出版されていますが、これには鯉淵学園、中央協同組合学園双方の卒業生が参加されています。

宮島先生は、小出満二、鞍田純の両先生を大変尊敬されていました。また、「鯉淵学園に入学してくる学生は、必ずしも優秀な者ばかりではないが、卒業していく時には“よし、やるぞ”という気概をもって帰っていつてくれるのが何よりもうれしい」と言われていました。鯉淵学園の卒業生が全国各地で、派手ではないが着実な実績を挙げてきたのは、これらの先生方の動機付けが大きな要因の一つになっているように思います。

さて、もう一人、古い期の卒業生にとって忘れられないのが早川孝太郎先生ではないでしょうか。早川先生は明治22年愛知県三河のご出身で、日本民俗学界では柳田国男と並び称される著名な方でした。著書も多く、代表的なものとして『猪・鹿・狸』(大正15年)、『花祭』(昭和5年)、『大蔵永常』(昭和13年)などがあります。早川先生は、鯉淵学園の創設時から昭和31年にお亡くなりになるまで、「村落社会」を講じておられました。早川先生の講義は「老人のボソボソとした話」で、率直に言ってよく分かるというものではありませんでしたが、私は講義のメモは一生懸命にとりました。全国から集まっている学生の間では先生の講義が切っ掛けとなって、郷里に残っている言い伝えなどを先生に報告(情報提供)すると話題がさらに広がり発展することになります。こうして、早川先生と学生や卒業生との関係は益々強い絆で結ばれることになっていったように思います。

早川先生は昭和8年から3年間、九州大学で小出満二教授(農業経済研究室)のもとで研究を続けられたこともあって、小出先生とは特に親しい関係にありましたが、“大学の研究室では農業経済学などという学問は農民の日常生活とはおよそ関係のないところで行われている”と批判的でした。民俗学が庶民の生活のなかで文字として書き残されることなく、日常生活のなかで生き伝わってきた事柄の収集から始まっているのには、こんなことにも関係しているのかも知れません。

早川先生の膨大な著作は、未来社から『早川孝太郎全集』(全12巻)として発刊されていますが、当初予定されていた「日記・書簡」が出版中止となったのは誠に残念なことです。



頑張っています！同窓生

今回の「頑張っています！同窓生」は、正木浩二さん(2期生)、井口成子さん(23期生)、新田義孝さん(31期生)、池尻能久さん(55期生)取材しました。

農業一筋に生きて



正木さん(右)と後継者の息子さん

桜の開花が伝えられた3月27日に、世界一の吊り橋で有名な明石海峡大橋を渡って淡路市河内にお住まいの正木浩二さん(2期生)をお訪ねしました。ご自宅の玄関で正木さん夫婦と息子さん夫婦が和やかに出迎えていただきました。

正木さんは10年前に脳梗塞を患われてから少し不自由なお体であるために、正木さんの奥さんと息子さんが一緒に取材に応じていただきました。現在は近くのデイケアサービスセンターに週3回通って、ひらがなや漢字の練習、指のマッサージ、歩行訓練、車いすでの移動などのリハビリに励んでおられ、見るからに大変元気なご様子でした。

正木さんは、昭和19年1月に満蒙開拓指導員養成所に入学され、その後昭和20年7月に陸軍に入隊され、翌月の8月に終戦を迎えられました。その1か月を経た9月に指導員養成所に復学され、11月に鯉淵学園の前身である全国農業会高等農事講習所に編入後、昭和22年4月に2期生として卒業されました。鯉淵学園創立前の終戦前後の混乱時に苦難の学生時代を送られました。

卒業後は故郷の淡路島に帰って農業に専念されました。当時は水稻、麦、玉葱、野菜などを栽培するために牛を飼い、人を雇って作業をされていたそうです。特に水田は100枚を超える棚田であったため、苦勞が絶えなかったそうですが、その後の農業機械・技術の進歩、昭和58年頃からの北淡路総合パイロット事業で河内ダムと圃場が整備されました。そのおかげで棚田が25枚になり、農作業が非常に効率よくなったそうです。今では、

会社を定年退職された息子さんが農業後継者として、正木さんの意志を継がれ、水稻（160a）、玉葱（20a）、野菜（20a）などを栽培しながら、地域農業のリーダーとして河内地区の活性化に努めておられます。

正木さんは、農業の近代化のために情熱をもって励まれていた傍ら、昭和27年に青年団長を就任され、消防団長、農協理事、民生・児童委員、土地改良区役員、そして平成13年の老人会長に至るまで多くの役職を歴任されました。特に、昭和60年前後に土地改良区役員として当時懸案になっていた棚田の改善を果たし、平成7年に発生した阪神淡路大震災では、大被害を受けた当地区の家屋、墓の建て替えや農業倉庫、ため池などの農業用施設の改修に尽力されました。さらに昭和44年から30年間、民生・児童委員を務められた功績から、平成10年11月に厚生大臣及び兵庫県民生委員児童委員連合会から感謝状の贈呈、そして東浦町から福祉賞が授与されるなど地域社会に大きく貢献されました。

現在の楽しみは、テレビ観戦（大相撲、高校野球、プロ野球、駅伝、マラソンなどの主としてスポーツ）だそうです。また、若い時からの趣味として、その日の天気や大きな出来事を欠かさず日記に記帳されていたので、以前のように記帳できるようデイケアサービスセンターでリハビリを続けているとのことでした。その日記を農業に活用されている息子さんは、「父が昔から記帳していた日記のおかげで大変助かり感謝している。」と話されていました。

10年前まで、本県同窓会には必ず出席されていた正木さんに同窓生の話をしめすと2期生の名前をあげられ、「彼は元気なのか」と尋ねられました。既に亡くなったことをお伝えしますと寂しそうな表情を浮かべておられました。正木さんのお姿が4年前に95歳で亡くなった私の父親によく似ておられるので、帰路の車中で女房と生前の父親の思い出話をしました。正木先輩、どうかお体をご自愛いただき、末永く元気で過ごしてください。

花と緑を通して人との交流を



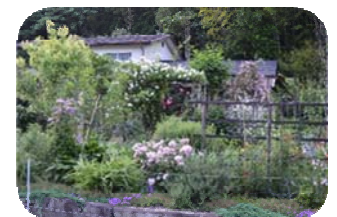
庭園の花に囲まれた井口さん

4月15日、桜が満開の綾部街道（国道173号線）を少し入った篠山市小原にお住まいの井口成子さん（23期生）をお訪ねしました。とても手入れが行き届いた庭園には、水仙など春の花が美しく咲いていました。この庭園を眺めながら井口さんにお話をお聞きしました。

井口さんは昭和41年に農村生活科に入学されました。入学当初は退学することばかり考えていたが、一学期が終わり先輩・同僚と岩手山に登ってから頑張ろうという気持ちになったそうです。在学中は白田先生や荒井先生に教えていただき、また農学ゼミでは農家に宿泊して貴重な農業体験をしたと話されました。学生自治会では半年間栄養部に属し学生の食事を世話していたそうで、時には献立表が間に合わず大変であったとの苦労話もされ、学生時代を懐かしく振り返っておられました。

昭和43年3月に卒業後、翌月に兵庫県経済農協連に就職し、生活指導の業務に従事されました。昭和43年12月から昭和45年3月までは兵庫県上郡農業改良普及所に勤務し、生活普及員として活動されました。そして昭和45年4月から兵庫県生活文化部、柏原生活科学センターで専門の消費生活で活躍され、平成12年3月に退職されました。その後、平成12年4月から平成16年3月までは兵庫県氷上福祉事務所家庭相談員（非常勤）として母子家庭や障害者などの問題に取り組みされました。

【昨年と一昨年に開催された井口さんのたんばオープンガーデンです】



現在は約40坪の庭園や自宅の周囲にバラなどの四季を通じて楽しめる多彩な花を植え、丹波の森花クラブが主催する「たんばオープンガーデン」のメンバーとして活動されています。この「たんばオープンガーデン」は今年で12回目を迎え、丹波の春を愛でる行事として定着し、花や緑を愛する約43名の仲間が参加しています。

井口さんに花を栽培する動機をお聞きすると「退職したのは義母を介護するためであった。義母を介護しながら楽しみ、周囲の人々にも楽しんでもらうのは花栽培であった。」と当時のことを話されていました。その義母も10年前に他界されたそうです。また、「昔は近所の人々との交流は家の縁側で行われていた。だから庭も縁

側の役割がある。」と話され、庭園を通した人との交流の必要性を説明されました。

井口さんの庭園は、「たんばオープンガーデン」として、「向イ谷ガーデン」という名称で6月1日、2日に一般公開されます。井口さんは「オープンガーデンの花や緑を通して多くの方々と交流し、地域を見つめ直すきっかけづくりをしたい。そしてバラの成長とともに変化したガーデンをご覧いただきたい。」とPRされていました。

地域の活動では、平成17年から総務省の行政相談委員として月1回から2回、相談日を設け住民からの各種相談を受けているそうです。また、兵庫県のガーデンマイスター、花と緑の推進員としても活躍されています。

現在の楽しみは夫婦で年に1回海外旅行をすることで、これまで13ヶ国以上を旅行されたそうです。今年も7月にイギリス旅行を計画中のことです。趣味は週1回の英会話教室とストレッチ体操、月2回のトールペイントだそうです。将来のことをお聞きすると、「夫婦2人で健康に気をつけ、子供たちや孫たちが帰って来なくなる場所を作りたい。」と話されていました。

鯉淵の同窓生に伝えたいことをお願いしますと「静岡県の新関さんのおかげで定期的に同期会が開かれ、全国の仲間に出会えるのが楽しみです。」そして「農村は高齢化が進み、限界集落になりつつありますが、悲観的に考えず、そこに住んでいる人が如何に楽しく暮らしていくかを提案しましょう。」と明るく話されていました。

取材が終わりに近づいた時、ご自宅の前の道を山歩きの見知らぬ二人連れ女性が「まあ～素敵な庭園ですね。」と言われたので、井口さんは「どうぞ庭園の中に入ってください。6月1日と2日にオープンガーデンをしますのを見に来てくださいね。」とお誘いの声をかけられていました。井口さんの人柄を感じたひとときでした。井口先輩、オープンガーデンのご盛会をお祈りいたします。

期生)をお訪ねしました。当日、ご本人と奥様が笑顔で迎えていただき、さっそく客室に案内されました。学生時代の思い出や肉用牛繁殖経営の取り組みを中心にお話を聞かせていただき、その後、200メートル離れた牛舎にいくと可愛い子牛たちが出迎えてくれました。

新田さんは学生時代を振り返り、畜産科で学んだ多くのこと、懐かしい先生のこと、自治会活動で文化部に所属していたこと、つくし寮で過ごした先輩・同僚・後輩との寮生活のこと、そして洗面器でラーメンを作って食べたことなどを懐かしそうに話されていました。

卒業後、昭和51年に豊岡市農協に就職し、主に畜産関係の指導員として13年間勤務されました。昔から動物好きだったので、農協に勤務していた時から和牛2～3頭を飼育し、業務が忙しくて牛の世話ができないときは両親が代わって面倒をみていたと話されていました。本格的な繁殖牛経営に取り組みしたのは農協を退職してからです。繁殖牛は農協からの預託牛として導入し、牛舎は自己資金で建てたため、当初は厳しい経営だったそうです。その厳しい経営を支えたのは当時公務員として働いておられた奥様であり、とても感謝していると話されていました。



自慢のぼたん号とその子牛

繁殖牛経営に夢をもって



牛舎での新田さん

現在の肉用牛繁殖経営をめぐる環境は、生産者の高齢化、後継者不足、飼料価格の高騰等を背景に小規模農家の廃業が進み、それに伴う繁殖雌牛頭数の減少、肥育素牛の不足など大変厳しいものがあります。そのような厳しい状況が続く中で新田さんは、繁殖牛を32頭にまで増やし、その粗飼料となる牧草は国交省から借り入れた円山川の河川敷草地5haから調達されるなど、繁殖牛経営農家の中心的存在として活躍されています。また新田さんは、親牛から子牛に伝わる遺伝的能力を枝肉重量や脂肪交雑などの数値(データ)で示す育種価に取り組み、繁殖牛経営農家はもとより肥育牛経営農家からも大変注目されています。「数値の裏付けがあれば肥育牛農家も安心して子牛を買ってくれます。子牛の値段は信頼の証しです。」と経営にとって科学的数値の重要性を強調されました。その証拠として、飼育されている繁殖牛「ぼたん号」は、県知事の認定を受けた優良牛であり、その子牛は高値で取引されているそうです。

3月18日、豊岡市中郷にお住まいの新田義孝さん(31

新田さんは、平成 25 年度に豊岡市の農会長として、人・農地プランの推進に貢献されました。さらにコウノトリと和牛と人の共生をめざす地域再生の協議会にも参加されました。今後、国の遊水地計画(湿地)として、「コウノトリと和牛と人の共生する原風景を作ろう」という構想が地元の中筋地区を対象に検討される予定であり、その推進役として地域に貢献したいと話されていました。

これからの展望をお聞きすると、2年前に大学(経済学部)を卒業された息子さんが後継者として新規就農されるので、そのために補助事業を活用し、繁殖牛の増頭や牛舎・堆肥舎の拡大整備などを今年の秋頃から取り組む計画だそうです。そして、将来は繁殖牛と肥育牛の一貫経営の実現に努力したいと話されていました。

趣味は魚釣りで、「近くの川で魚釣りをすると以前はスズキがよく釣れたものだ。」「今は牛飼いが忙しくて、釣りをする時間がない。」と話されていました。

最後に同窓生に一言をお願いすると、「私は農業に夢をもってやっていますと伝えてほしい。」と話されました。

新田さんの後継者である息子さんが、数年後には立派な経営者として独立され、繁殖牛と肥育牛の一貫経営が実現することを願っています。どうか健康にご留意いただき益々のご活躍をお祈りいたします。

六次産業化で農業の活性化を



ハウス内の池尻さん

4月9日、野菜の産地で知られる南あわじ市にお住まいの池尻能久さん(55期生)をお訪ねしました。畑一面に玉葱、キャベツなどの野菜が作付けされている田園風景を見ながら約束したハウスの前で待っていると池尻さんが来られ、早速ハウス内で話をお聞きしました。ハウス内では大量の野菜苗が栽培されていました。

池尻さんは農業科の卒業で、学生時代の4年間はよき先輩や仲間にも恵まれ、互いに励まし合いながら勉強したり、時には一緒に酒を飲んだりと楽しい思い出を懐かしく話されていました。

卒業後、地元の「あわじ島農協」に就職し、3年間営農事業の育苗センターで働き、その後父親が経営されていた農業を継がれました。この農業を継いだ動機は、幼い頃から両親の働く姿を見て育ったので、自分も農業をやるという目標が学生時代からあったそうです。

現在では、池尻農園の代表としてパート5名、臨時8名を雇用しながら、ハウス栽培と露地栽培を営んでいます。ハウス栽培は池尻さんが担当で、野菜苗、花苗をハウス7棟(35a)で四季を通じて栽培し、その栽培した苗はホームセンターや市場に大量出荷されています。当日、ハウス内では、ミニトマト、ブロッコリーなどを育苗され、別のハウス内ではパートの人が機械でポットに育苗土を入れる作業をされていました。また露地栽培はご両親が担当し、玉葱(70a)、レタス(40a)、ブロッコリー(30a)、稲などを栽培し、農協や青果店に出荷されています。

今後の農業経営ビジョンをお聞きすると、「現状を維持しつつ、生産から流通・販売・加工までを行う農業の6次産業化を試行錯誤している。」と目を輝かせて話されました。昨年、野菜ソムリエの資格をご夫婦で取得し、暇があれば趣味を兼ねて美味しいレストラン巡りをし、将来への準備をされているそうです。

また、池尻さんは地元の祭りや消防団のリーダーとして幅広く地域社会に貢献されています。最後に同窓生へのメッセージとして、「同窓生の中に農業の六次産業化に取り組んでいる人や、野菜苗と花苗を栽培し販売している人がいれば、情報交換をしたいので連絡をいただきたい。」と話されていました。池尻さんのビジョンが早く実現しますように祈っています。頑張ってください。



育苗土をポットに入れる作業中



学舎を去る 67 名



卒業生・教員で記念撮影

平成 25 年度の卒業式が 3 月 6 日（木）に開催されました。今年度は食農環境科 25 名、食品栄養科 33 名の本科生（第 67 期生）および研究科生 9 名が卒業しました。とくに、研究科生の 9 名は、平成 25 年度に研究科が制度化されて初めての卒業生となりました。

卒業式では卒業証書の授与のほか、優秀学生に対しての各種表彰および 1 年間図書館の運営を補助された図書協力員への感謝状授与も行われました。卒業式後の会食会では、下級生たちが思い出のシーンをスライドショーで紹介するサプライズもあり、楽しい時間をすごしました。そのあと、学科ごとに分かれ、卒業生に卒業証書を一人ずつに授与し、時に厳しく、時に優しく、学生に近い立場で指導してきた教員から 2 年間の思いがこもったメッセージがありました。夕方には、卒業生主催の謝恩会が実施され、卒業式の日程は無事終了しました。卒業生たちには就職先での事前研修などの準備があり、早い者は卒業式当日の夜に就職先の地に移動してきました。

卒業生、おめでとう！

鯉学に 80 名が入学



希望に満ちた入学式

平成 26 年度の入学式が 4 月 2 日（水）に開催され、

全国各地・海外から食農環境科 35 名、食品栄養科 45 名の本科生（第 69 期）および研究科生 8 名と来賓、保護者、在校生、職員が参列しました。

入学式では、学園長・理事長が式辞を述べたほか、来賓の方々から祝辞がありました。食と農の分野で活躍することを志す新入生に、それぞれの立場から暖かい励ましの言葉がありました。そのあと、在校生を代表して自治委員長が歓迎の辞を述べたあと、新入生の代表が答辞を述べました。

入学式後は、新入生と同伴した家族が学生食堂と一緒に会食し、午後は各学科に分かれてのオリエンテーションが開かれました。新入生たちはこれからの 2 年間、専門知識・技術を身に付けて、希望の進路を叶えられるよう勉学に励むことになります。頑張れ、新入生！

会費納入のお願い

平成 25 年度の本県同窓会支部会費納入者は 55 名（納入率 47.4%）で、当初の目標を上回ることができました。ご協力を感謝いたします。平成 26 年度の支部会費につきましても第 4 号の支部だよりとともに、会費納入の郵便払込票を同封しておりますので、お支払いいただきますよう何卒よろしく願いいたします。

なお、同窓会本部の会費につきましては、同窓会事務局から会費納入依頼があれば、お支払いいただきますようご協力をお願いいたします。

情報提供コーナー

小島好文さん（11 期生）が下記住所に転居されました。

- ・新住所〒651-2242 神戸市西区井吹台東町 1 丁目 5 番地の 1 23-102
- ・新電話番号 078-990-3085

編集後記（平成 26 年 5 月）

同窓会本部から学園の卒業式、入学式の情報いただき支部だよりに掲載しました。今回の第 4 号は 2 ページ増やして 6 ページにしました。「頑張っています！同窓生」は 4 人の同窓生を取材しました。そのうちお一人は女性です。次回の第 5 号支部だよりは 11 月頃に発行する予定です。

同窓生の皆さん、支部だよりを充実するために、今後とも執筆・取材のご協力とご意見・ご感想をお寄せください。また、住所、電話番号、職業等の変更があれば是非お知らせください。

編集者：福井寛行（26 期生）

〒677-0038 兵庫県西脇市大垣内 44-2

TEL (FAX) 0795-22-1815 携帯 090-1022-2672

E-mail : hirokei-677@lime.ocn.ne.jp